

平成30年に特に注意を要する病害虫

道総研 中央農業試験場 病虫部 予察診断グループ

1. はじめに

北海道病害虫防除所、道総研各農業試験場、および道農政部技術普及課等で実施した病害虫発生予察事業ならびに試験研究の結果から平成30年に特に注意すべき病害虫について報告する。

2. 平成29年の病害虫の発生状況

平成29年は6月に道央を中心として多雨となり、りんごの黒星病が多発した。7月には記録的な高温があり、あぶらな科野菜におけるコナガの密度が上昇した。一方で7月の降水量は少なかったため、てんさいの褐斑病などは多発には至らなかった。近年問題となっている秋まき小麦のなまぐさ黒穂病は平成29年度も道内の広域にわたって発生した。

主要病害虫で多発となったのは、ブロッコリーのコナガ、りんごの黒星病、腐らん病であった。やや多発となったものは、水稻の紋枯病、ヒメトビウンカ、秋まき小麦の雪腐病、春まき小麦（初冬まき）の赤かび病、小豆の灰色かび病、ばれいしょの軟腐病、黒あし病、りんごの斑点落葉病であった（表1）。

表1 平成29年に多発・やや多発した主要病害虫

作物名	病害虫名
水稻	紋枯病、ヒメトビウンカ
秋まき小麦	雪腐病
春まき小麦 (初冬まき)	赤かび病
小豆	灰色かび病
ばれいしょ	軟腐病、黒あし病
ブロッコリー	(コナガ)
りんご	黒星病、斑点落葉病、腐らん病

下線は多発生となった病害虫を示す
括弧は平年値がないため暫定的な評価を示す

3. 平成30年に特に注意を要する病害虫

1) てんさいの褐斑病

てんさいの褐斑病においては、平成29年に新たに DMI 剤に対する耐性菌の出現と、カスガマイシン剤に対する耐性菌発生の拡大が報告された。これらの耐性菌は全道に広く分布していると考えられ、本病に対する防除では特に注意する必要がある。

薬剤散布を行う際には、DMI 剤およびカスガマイシン剤（いずれも混合剤を含む）の使用回数を可能な限り低減するため、マンゼブ剤や銅剤を基幹薬剤とする。また、地域の平年初発期や予察情報を参考に、初発直後までに散布を開始する。散布間隔は14日以下とし、特に本病の感染に好適な高温や多湿条件となる場合には10日以下とする。8月下旬で散布を終了すると、その後の発病が急激に進展するケースが多いため注意する。

また、本病の発生を抑えるためには、薬剤散布によらない耕種の防除を積極的に取り入れることも重要である。具体的には、感染源を高めないために連作を回避し、本病に対する抵抗性が“強”の品種を作付けする。

2) あぶらな科野菜のコナガ

あぶらな科野菜のコナガは、道内において平成26年にジアミド系薬剤に対する抵抗性遺伝子を保持した個体が確認され、平成28年には生産現場においても春季から夏季にかけて抵抗性遺伝子の保持割合の上昇が確認された。

平成29年にも、道内の一部生産現場から、コナガに対するジアミド系薬剤の効果が低く防除に苦慮しているとの情報が寄せられている。また、試験機関が実施した防除試験においても、ジアミド系薬剤の防除効果が従来よりも高くはないことが確認されている。

これらへの対処として、従来からの注意事項である、①ジアミド系剤を含め、同一系統薬剤の連用を避ける、②防除実施後の効果の確認に努め、防除効果が低いと判断された場合は、他系統の薬剤による追加防除の実施を検討する、③灌漑剤、茎葉散布剤としての使用時に、所定の処理量を遵守することが大切である。